

「はあ……なるほど」

困惑する私なんて気にする事なく話が進む。

もはやこちらなど見ていない。私は現役の作家で、今日は打ち合わせでここに来たはずなのだが……打ち合わせとは何だったか。

目の前の強引に話を進める女性は私の担当編集。という名のオタクでどこか普通の編集とはズレた視点から意見をくれる。有難いと言えば有難いのだが……今は落ち着いてほしいと心から思う。そんな意志を汲み取ったのか彼女はやっところらを見て話を止めた。

「あの、ここまで分かりました？」

「いえ、途中から聞いてませんでした」

ちよつと！と言いながら怒っているが、覚えている限り最後の方は彼女の推し？ についてだったと思う。

軽く流してもう一度聞くと今度は掻い摘んで必要な部分だけ伝えてくれた。

「つまり、今回は受験生や学生向けに、進路に関係するような話を書いてほしいと？」

「そうです。最近の若い子は全くと言っていいほど創作に手を出さない！なぜなら勉強が正義だと教えこまれるから！」

「あれ？君ハタチくらいじゃなかった？」

「そして……そんな汚れた大人たちに汚され、やれあの仕事は儲からないだとかあの仕事はしんどいとか言ってる先生の言う通り周りに合わせ無難に進学し無難に就職するのです」

言ってる事はまあ的を得ているのだが、若い彼女が言う違和感が凄い。これがギャップと言うやつだろうか。

「うーん……まあ大体は分かった」

「では締切は最初にお話した通りでお願いします！秋の進路に悩み始める1年生やまだ決まってる2年生を狙ってるんですから、遅れないようにしてくださいね？」

受けたはいいものの、題材が若者向けで進路というのは扱いづらいというか……こんな歳食ったおじさんが書いてもいいものなのだろうか？まずはそこから分からない。

そして、私は学生時代に勉強についていけなかった馬鹿なので特に進路に悩まなかった。まあ芸術方面しかないよな、と即断即決。進路相談では応援もされなかったが止められもしなかったし、私に分かる若者向けの進路の話といえはよく見るものしか書けない気がする。

「うーん……分かん。とりあえずいつもの所にも行くか」

作家とは決めたら行動が早い生き物だ。そして飽き性でもあるし、研究家気質でもある。やはり良いものを生むには場所を変えたりするのも大事なのだ。

そうしてアレコレと考えながら身支度を整え、外へ出た。

外は雪が降るような数ヶ月前と比べれば随分と暖かくなったがまだ羽織物は必須である。

いつもの所というのはそう遠くはないのだけれども、少し歩く場所にある、小さな個人経営の喫茶店だ。あそこの珈琲がまた美味く、しかも落ち着いたレトロな店内で人も少ない。

よく来る常連もその雰囲気が入っているのか変に騒いだりせずゆったりと過ごしている。物を書く時は静かな所で集中したい私にぴったりなのだ。

からんころん、とドアベルの音が響きいつもの店員がくる。

「いらつしゃいませ。いつもの席、ちょうど埋まっちゃってるんですけど近くの席とかでもいいですか？」

「構わないよ、埋まっているなら仕方ないさ」

「ありがとうございます。案内しますね、お飲み物はいつもので？」

「ああ。お願いします」

……いつも同じ席にばかり座っているから気付かなかったが、この席からの景色も街がきらきらと綺麗に見えていいな。案外自然にばかり目を向けていても綺麗なものは書けないのかもしれない。

コトリ。カップが置かれた音がして視線を移せばそこにあつたのはいつもの珈琲ではなくいかにも甘そうな飲み物が置かれていた。

店員に視線を投げればにこやかな笑顔が返ってくる。

私が戸惑っているのなんて気に留めず店員は説明を始めた。

「これ、試作品です。珈琲を売りにしているんですけど常連さんが小さい子を連れて来ることがあって、今のメニューじゃ飲めるものが少なくてかわいそうかなって店長が。それでフルーツ系の飲み物ならどうだろうって考えてるみたいなんです。もしよければご贖儀にしてくださいませ。貴方に感想をいただきました……」

ふむ、なるほど……試作品か。フルーツ系の甘いものはあまり得意ではないが……頼ってもらつたのに突き返すのも悪いな。

「ああ、それなら飲もう。フルーツ系の飲み物はあまり飲まないから参考にならないかもしれないが構わないかい？」

「もちろんです！ありがとうございます！」

分厚いガラスのジュースグラスに入った黄色……？ パインに近いような色のジュース。良いのどごしに甘すぎない味。とろみもないからすごく飲みやすい。

「これ、とっても飲みやすいね。飲み心地もいいし、甘すぎないから甘いのが苦手な子でも飲めるんじゃないか？」

「本当ですか！ 良かったです、店長にも伝えておきますね！ ありがとうございます！」

すぐに珈琲お持ちしますね、という彼女に注文を変えたいから後で呼ぶと伝えて原稿を取り出す。

さてどうしたものか、今ならなにか良いものが書けそうな気はするがそれはこの題材ではない。進路、進路か。そもそも私の時代と今の時代の進路選びの違いとは何があるのだろうか？

あの時担当編集は『勉強が正義だと教え込まれる』だとか『儲かるかどうか、楽かどうかで仕事を決める』と言ってたが、私がハタチくらいの時代はバブル期で景気が良かったからそこそ頭がよければ高卒だろうと良い所、デカイ所に入れた。そもそもどこに行こうと儲かったから自分がなにをしたいかで業界を選べた。勉強が大事とは教わってきたが、就職が難しく上に稼げるから特に重く捉えていなかったのかもしれない。

そう思うと今の子は凄いとしか言いようがないのではないか？ なにをしても稼げないしデカイ所に入るには死に物狂いで勉強して良い学歴を作らないといけないと聞いている。そりゃ儲かるかどうか、楽かどうかで選ぶに決まってるではないか。

夜景は遅くまで働いている人たちの頑張りで出来ていると聞いたことがある。日本には数多くの夜景スポットがあるがその内のどれくらいが社会人になったばかりの子達なのだろう？ 死に物狂いで入ったとしても幸せになれるとは限らない。『窓からは光が溢れ、中にいる人の瞳からは光が消える』とは上手く言ったものだ。

この現状を踏まえて私は何を伝える為に何を書いたらいいんだ。『昔はこうだったから君たちは凄い』？ 『死にそうになるなら仕事なんてしなくていい』？ なんだかどれも違う気がする。

悩んでいる内に気付けばあの甘そうなジュースはなくなっていた。

その後、いつもの苦めの珈琲を飲む気になれず、柄にもなくカフェオレを頼んで執筆を続けた。けれど答えが出ることはなく、その日は帰路についたのだった。

いまいち考えがまとまらず、もはや原稿用紙を破り捨ててしまおうかと考えていた時。突然携帯の着信音が鳴り響いた。

私にかけてくる人など限られているので名前も確認せず応答する。案の定担当である。

「お疲れ様です。進捗どうですか？」

二言目には進捗か。この担当もしかして人の心が無いのではなからうか。

「……正直駄目ですね。何を書けばいいのかまるで分かりません」

「やっぱりですか。まあ正直予想は着いてましたけど……本当に何も浮かばないんですか？」

「ええ。なにをテーマに、というか。なにを伝えればいいのかさっぱりなんですよね」

「なるほど……ならとりあえず明日予定がなければ打ち合わせ挟みましょうか。私もできることはお手伝いしますよ！」

「本当ですか？ じゃあお願いします。昼頃の方が空いています？」

「こちらは明日は午後3時頃が空いていますよ」

「じゃあその時間にいつもの喫茶店にしましょうか」

「分かりました。じゃあ明日の午後3時からよろしくお願いします！」

そう言って電話は終わった。そして浮かばないものは仕方がない、とその日私は寝てしまったのだ。

翌日、いつもの喫茶店に行くと既に担当は座っていた。いつも本社以外での打ち合わせは遅刻ギリギリなのに珍しい。

「待たせてすみません」

「いえいえ、こちらが早く着いてしまったただけなので気にしないでください！ 飲み物はいつものですよね？」

こちらの返事も待たず、自分の注文と一緒に苦めのいつもの珈琲を頼んでしまった。別にまたカフェオレを頼んだりするつもりもなかったので良いのだが、この子はこんなのでこの先大丈夫なんだろうか……？

まあそんな事は置いておいて。問題の原稿である。

テーマすら決まっていないのでもちろん白紙。いくら締め切りに余裕があれどそろそろ導入くらいは書いていないと不味いくらいになってきている。

取り出した用紙の束を見た担当は分かっているにも反応してしまうものなのか少し驚いた顔をしていた。

「……本当に白紙ですね」

「そうですね……」

この反応を受けてさらに申し訳なくなってきた。

「えーっと……まず先生は進路についてどうお考えなんですか？」

なるほど。なんだかカウンセラーみたいな感じで来たな。

「それが、私の時代と今の時代の進路について考えた時に今が悲惨すぎて何を伝えるべきなのか分

からなくなつたんです。昔はこうだったからとか君たちは頑張つてて凄いと、なんだかそういう事ではない気がして」

「ああ、なるほど。考えすぎて分からなくなつたタイプですか」

「まあ……」

何がるほどなんだろう。彼女の言う事考える事はいつもよく分からないが、今日はそれが輪をかけて分からない。

「そんなの簡単ですよ。先生が感じた事を書けばいいんです。進路なんて狭い枠組みの中で探そうとするから見つからないんです」

狭い枠組み、か。確かにそうかもしれないけれど、それならどこを探せば見つかるものなんだ？

「じゃあどこを探せばいいんだ、って顔してますね。いやー先生にも分からない事があるんだな」
そう言つて彼女は笑つた。流石に真剣に悩んでいるのに笑われて腹が立ったので言い返してやろうと思つたが、話の腰をこれ以上折る訳にはいかないと思ひ留まつた。

「それで？　そこまで言うなら貴方の意見を聞こうじゃないですか」

「ふふ、すみません。どこって程じゃないですよ？　最近ふと思つた事とかなんでもいいんです。そうだなあ、じゃあ例えばここ数日でどこ来ました？」

「来ましたが、それがどう繋がるんです？」

「来た時いつもと違つたこととかなにかふと考えたりとかなかったんですか？　別にその日は空が綺麗だったとかでもいいんですけど」

空が綺麗とか……ああ、そういうえば

「いつもと席が違いました。その席は街が綺麗に見える席だったんです」

「ほうほう。そういうのでいいんですよ、他には？」

「ああ、試作品とかで甘そうに見えるジュースを飲みました。甘い飲みものは得意じゃないがそんな私でも飲みやすいジュースだった。それでその後、苦いのを飲む気になれず、珍しくカフェオレを飲んだんです」

「なーんだ、いっぱいあるんじゃないですか！」

はあ、たったこれだけの事で何が分かると言うんだ。さっぱり分からん。

「それが何だと言うんです？」

「それって全部たまたまにしろ何かいつもと違う事をしてみて気付いた事ですよ？　私、進路もそういうものだと思うんです」

進路もそういうもの？　いつもと違う事をするのが？

「そりゃ医者になりたい！　とか決まつてる子だったらそれに向かつて突き進めばいいじゃないですか。でも決まつてない子ってどうやって決めればいいんだー！　ってなりますよね？」

「まあそうですね」

「そういう子がなりたいものとかやりたい事を見つける瞬間って、きつとそういうふとしたきっかけなんです。歌を褒められて歌手を目指し始めるとか、アニメに感動してアニメ制作に携われる仕事に就くとか」

言われてみれば確かに、私が作家を目指したのも学業が不得意で芸にしか道がなかったからだ。深いきつかけなんてなかったかもしれない。

「それにね、進路って学生だけの悩みじゃないですよ。先生だって、私だって、これから先も人生をどう歩むか進路に悩みながら生きていくんです」

それを聞いて、なんだか私の中で全てが繋がつた。『進路』が壮大で私の体じゃとても抱えきれ

ないようなものからとても身近で常に持っているものに変わったのだ。その場でぎつとあらずじや話の流れだけ書き起こしすぐに解散した。家の方が良いものが書ける気がしたから。

家に帰ってすぐに自分の中の世界を書き起こした。夜も眠らず、必要最低限の食事だけして。そして本はすぐに出来上がった。後書きを書くのがこんなに楽しみだった本は今まであっただろうか？

本編とはまた別の、私が私の言葉で考えを伝えられる場所。もちろんあの打ち合わせの時にした話だって書いた。それと、こうも。

「『進路なんてそんなに壮大なものではない。本当は今日の服を決めるくらいに軽くてもいいのだ』

へえ、いいじゃないですか。いや、あそこからこんな短期間で上がるなんて思いませんでしたよ。ありがとうございます、原稿頂いていきますね！」

あれから数日後、原稿の受け渡しをするためにまたいつもの喫茶店に来た。

ふと斜め前を見ると小さい子供がよく顔を見る常連の横に座って、何時ぞやのあの飲みやすいフルーツジュースを飲んでいた。

「これおいしい！ おじさんありがとうございます！」

ここまで聞こえてきたその子の嬉しそうな声、ここから見える眩しい笑顔に私まで嬉しくなる。もしあの時得意ではないからと試作品を断っていたらあの笑顔はなかったのかもしれない。

「お、あの子が飲んでるの美味しそうですね。私も頼んでみようかな」

担当もわくわくしながら同じものを注文しているのを見て私はふいに理解した。世界はこうやって回っているんだなあ、と。きつとこういう事なのだ。

「お待たせしました、フルーツジュースです。あ、先生この前はありがとうございます！」
ううむ、実際の反応を見た後に改めて礼を言われると何だかこそばゆいものがある。

「いえいえ、お役に立てたようで何よりです」

「今後ともご贔屓にお願いしますね。あ、サービスにつて店長がこれを」

そう言っつていつもの店員がテーブルに置いたのは珈琲一杯無料券。店長はいないかとカウンターに目をやればグラスを拭きながらこちらに会釈してくれた。こんな粋な事をされてしまつては贔屓にするしかないなあ、と少し笑つてしまう。

「ありがとうございます、もらつておくよ。またこんな美味しい珈琲が飲めるならいくらでも来るさ」

その後ひと言ふた言交わして店員は仕事に戻つていった。

「あ、もしかしてこのジュースが言つてたやつですか？」

「ええ、そのジュースだと思います。私が飲んだ後にまた改良したかもしれませんかね」

「うわー、先生が飲みやすいジュースか、本当に飲みやすいんだろうな……」

彼女は一口飲むと「美味しい！」と言つて無言で味わい始めた。こんなに言つてもらえるなら本当に飲んでよかつたな。

そういえば、『情けは人の為ならず』は“人の為ではなく巡り巡つて自分の為になるんですよ”というのが正しい意味だと聞いた事がある。真偽の程は分からないが、正しくこういう事なのではないだろうか。

そんなことを考えながら、ゆつたりとした時間を過ごした。

「わ、何この本。なんかよく名前聞く人のやつだ」

何の気なく手に取った本は最近よく名前を聞く作家の新作だった。最近はいろんな用事が重なって、忙しくて本なんて開く暇もなかったから表紙に惹かれて見てみただけなのに。

なんだかすぐに引き込まれて、はやく、はやく続きが読みたいと思ってしまう作品。本屋さんに悪いから続きは買ってから読もうと後書きを開いた時だった。

自分でも訳が分からない。けど、目が離せない。最後まで読み切らなきゃいけないという義務感に駆られて閉じることが出来なかった。後書きの内容は『進路をテーマに、結構歳を食ったおじさんが担当編集に教えられながら悩んで書き抜いた一冊』だという事、それと『今の子は進路大変だね』とかそんな内容。ただ作者が感じた事を書いてある場所だった。でも、最後の方に書いてあった一文が、もう頭を投げ捨てたいほどこれからに悩んでいた私に刺さったんだ。

気付けば私の頬には一筋の涙が流れていた。